

「ユネスコ加盟 70 年の歴史をたどる」

本コラムは 2021 年の日本のユネスコ加盟 70 年を記念して、当時の文部科学省大臣官房文部科学戦略官である町田氏が個人的な見解を記したものです。内容は 2021 年執筆当時のものであり、また、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会をはじめ、日本政府の公式な立場を示すものではありません。

第 12 回：ユネスコの科学事業（3）

（文責／町田 大輔）

前回、前々回とユネスコの科学事業の中の海洋学事業について記しました。自然科学事業において海洋学とともに政府間の委員会（理事会）を設けて長年実施されてきたのが、「国際水文学計画（IHP；2019 年に政府間水文学計画と改称）」と「人間と生物圏計画（MAB）」の二つです。

日本はユネスコに加盟して間もなく、海洋学の研究協力を強く主張し実現させましたが、当時一步進んで検討されていたのが、乾燥地帯の水資源開発でした。日本が加盟する前の 1948 年の第 3 回ユネスコ総会で早くも国際研究所（International Institute of the Arid Zone）の創設が提唱され、1950 年の第 5 回ユネスコ総会で暫定的に設置された乾燥地帯研究の国際諮問委員会の勧告により正式な諮問委員会（Consultative Committee on Arid Zone Research）が設置され、乾燥地帯に関するユネスコの事業が始まりました。この委員会は 1964 年まで存続し、その間、乾燥地帯に関する数々の研究報告、シンポジウム、フェローシップの支給が実施されました。

1961 年にアテネで開催された国際水文学会（IASH；その後名称変更があり、略称は IAHS となった）のシンポジウムで、水文学の研究・教育プログラムをユネスコが中心となって実施することがアメリカの研究者によって提案されました。同年 11 月のユネスコ執行委員会でアメリカの代表がこの提案を伝え、審議の結果、水文学研究・研修プログラムに関する協力の方法を検討する政府間会議を 1963-1964 年事業・予算に盛り込むこととなりました。1963 年、1964 年と 2 度にわたって政府間の専門家会合を経て、このプログラムは少なくとも 10 年間継続する必要があるという認識が共有され、「国際水文学 10 年（International Hydrological Decade；IHD）」プログラムが採択されました。その際、実施のメカニズムとして、各参加国に IHD の国内委員会を設置すること、

ユネスコ総会で選ばれた 21 か国の代表による IHD 調整委員会を創設すること、国際機関と協力することが指摘されました。上記政府間専門家会合で採択されたプログラムは、1964 年 10 月～11 月の第 13 回ユネスコ総会で承認され、IHD 計画は 1965 年に開始されました。日本でも 1964 年(昭和 39 年)に IHD の国内委員会が設置されました。

ところで、「水文学 (hydrology)」という言葉は、一般にはなじみのないものだと思います。私はユネスコの事業を通じて初めて知りました。一言で言えば、陸地に存在する水の循環などを研究する分野ですが、当時は国によって、また研究者によって意味するところが微妙に異なっていたようです。そこで、IHD 計画を実施するに当たっては、まず水文学の定義を明確にするところから始めました。その定義とは、「地球上の水の生成、循環、分布、物理的・化学的性質、人間の活動への反応を含む環境との相互作用を扱う科学」です。IHD 計画では、地球上の水資源の十分な見積もり、蒸発・地下水・堆積物運搬・水質等に関する信頼できるデータを提供できる観測所網、研究のための代表流域・試験流域の確保、氷河と万年雪、専門家の育成（大学院レベルの教育・研修）が主要な協力テーマとなりました。

水文学というのはどの国でもあまり知られていなかったのですが、IHD 計画により人々の認識が高まり、観測網が整備され、水文学データの質が向上し、途上国の専門家が育成されました。「国際〇〇の十年」という計画が国連システムでは頻りに設定されますが、IHD ほど成功した例はないと言われています。

IHD 計画は 1974 年をもって終了しましたが、それ以降も継続する必要性が既に 1969 年の IHD の国際会議で認識され、その勧告は 1970 年の第 17 回ユネスコ総会で承認され、1972 年の第 17 回ユネスコ総会では「国際水文学計画 (International Hydrological Programme ; IHP)」の実施準備をすることが決まりました。1974 年に IHD の国際会議が再び開催され、1975～1980 年の実施計画の概要が採択され、同年の第 18 回ユネスコ総会で承認されました。

こうして 1975 年に IHP 第 1 期事業が始まり、テーマを少しずつ変えながら現在の第 8 期事業 (2014～2021 年) まで続き、昨年の政府間理事会で第 9 期戦略計画 (2022～2029 年) が承認されたところです。IHD の時は科学的な面に重点がありましたが、IHP になってからは水資源管理の実践的な面が重視されるようになりました。第 1 期では水質汚染や人間の活動による環境面の影響などが重視され、第 2 期 (1981～1983 年) では熱帯雨林地域、乾燥地域、沿岸地域などに焦点が当てられ、第 3 期 (1984～1989 年) では水事業の水文学的プロセス、水循環への人間の活動の影響、適切な水資源管理、人

材育成と情報提供システムといった大きな分野ごとにいくつかのテーマが設定されました。第4期（1990～1995年）には持続可能な開発のための水資源管理というような分野設定がなされ、第5期（1996～2001年）では全体テーマとして「傷つきやすい環境」における水資源管理といった言葉が出てきました。

私がユネスコ代表部にいたのは第5期の間ですが、この時に水関係のユネスコのパンフレットに、「20世紀は石油を求めて国々が戦ったが、21世紀は水を求めて戦うことになるだろう」というような言葉が書いてあったのが印象に残っています。日本でも第3回 World Water Forum（2003年）の開催準備を進めるため、建設省（現在の国土交通省）がユネスコに職員をこの頃派遣していました。1999年11月に松浦晃一郎事務局長が就任した後、実際にユネスコの水関係予算は大幅に拡充されていきました。1998年6月から2年間は山梨大学の竹内邦良教授（当時）が政府間理事会の議長を務めました。

第6期（2002～2007年）では水と社会との関わりに重点が置かれるようになりました。人間の福祉の向上の観点から水資源が公平に、持続可能に、倫理的に管理されるための指針を作ろうと考えていたようです。水資源をめぐる紛争を回避し、協力を推進するという目的のプロジェクトもありました。また、ユネスコが後援する水関係の国際的もしくは地域センターが世界各地に次々に設置され、日本でも筑波の土木研究所内に水災害・リスクマネジメント国際センター（ICHARM）が2006年に設置されました。

第7期（2008～2013年）では、「Water Dependencies: Systems under Stress and Societal Responses」という総合テーマを掲げ、当時のMDGs達成に貢献することを意識して、水資源管理体制（ガバナンス）の強化など、より実践志向の事業計画とするとともに、気候変動の影響への対応、環境面での持続性などを盛り込みました。昨年が最終年となった第8期（2014～2021年）では、「Water Security: Responses to local, regional and global challenges」という総合テーマを掲げています。6つある大テーマの第1が水関連災害で、第2が地下水となっています。日本では地下水を直接利用することはあまりないので、枯渇に向かっているとか汚染されているとか言われてもぴんと来ませんが、水害に関しては、近年は毎年大きなものに襲われているので、時宜を得たテーマだったと感じます。次の第9期（2022～2029年）の事業計画（Strategic Plan）は昨年6月に開催されたIHP政府間理事会会合で合意されました。①科学研究とイノベーション、②インダストリー4.0環境での水教育、③データと知識のギャップの解消（データを解釈・活用できるように集めること）、④気候変動下での包括的な水管理、⑤科学に基づいた緩和、適応、レジリエンスのための水ガバナンス、という5つの優先分野が設定されています。なお、IHPの正式名称は、2019年の第40回ユネスコ総会で「International

Hydrological Programme」から「Intergovernmental Hydrological Programme」と変更されました。

ところで、IHP が扱うのは、陸地の水＝淡水＝です。地球上に存在する水の大部分は海水で、淡水は 2.5%にすぎません。しかもそのかなりの部分が南極や北極の氷床や氷河として存在し、液体の水も大部分（98%）は地下水なので、人間が利用できる淡水は地球上の水のごく一部です（うち実際の利用は約 70%が農業用とされています）。淡水のことを英語で fresh water といいます。学術用語として使われるときは「新鮮な水」ではありません。ちなみにフランス語で淡水は eau douce。「甘い水」という意味です。水道水を飲んでも川の水を飲んでも「甘い」と思ったことはありませんが、塩辛い海水と比べれば確かに「甘い水」なのでしょう。ついでながら、河口付近にある海水と淡水が入り混じった水（汽水）は、英語で brackish water といいます。

次回は、「人間と生物圏計画」を取り上げたいと思います。



町田 大輔

1986 年（昭和 61 年）、文部省（現文部科学省）に入省。文部科学省・文化庁内の各部局のほか、他省庁、地方、独立行政法人、大学、研究所で様々な業務に携わったが、科学と国際分野の経験が比較的長い。1996～2002 年、旧文部省国際学術課課長補佐、在仏日本大使館（ユネスコ代表部）一等書記官、文化庁国際文化交流室長、文部科学戦略官としてユネスコに関わった。2023 年 3 月より、独立行政法人 国立文化財機構 アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）所長。

ユネスコ未来共創プラットフォームポータルサイトより
全 20 回の寄稿文をお読みになれます →

